

みんなの学校をながく・よく使い続けるには

吉村 彰（東京電機大学・教授）



学校が狭い意味での教育施設に特化し、初期に見られたみんなの施設で無くなってきたように思われます。今一度、「みんなの学校」とは何か、現代社会で問い直す必要があります。

次に「ながく・よく使い続ける」には、建物を適切に修理点検しながら維持管理することです。わが国では古くなったら建替える気風が根強く、しかも新築してからも何にも手入れせず、ひたすら古くなるのを待つといっても言い過ぎではない状況にあります。特に、学校はそうです。しかしわが国では、戸建住宅は持ち主の責任で維持されています。分譲集合住宅は区分所有法で維持管理が義務付けられているため所有者の総意により維持管理計画とその為に必要な資金を計画的に積み立てる仕組みが出来上がっています。もしもこのことが出来なかったなら、財産としての価値が低くなり、所有者自身の財産価値を損失することが明白となるからです。本来、公共施設も同様なのですが、なかなかその点が見えにくいのです。低成長時代の経済と同時に少子・高齢化社会という社会構造と重なり、スクラップ・アンド・ビルドの政策だけでは立ち行かなくなった背景で浮き彫りになったともいえましょう。西欧諸国に習いストックをながく・よく使いながら且つ、町並みやまちを作り上げる文化の創造としての「学校」をつくり育てていく視点が求められているのではないか。このことをみんなの学校づくりの共通認識として、ながく・よく使い続けるアイデアをみんなで創出したいものです。

人々の「思い」の中で生き続く学校

諸貫 幹夫（㈱巴コーポレーション・建設部門技師長）



ながく・よく使い続けるためには、言うまでもなく、建物を適切に維持管理しながら、必要に応じて補修・修繕を続けてゆくことが大切である。それにも増して大切なのは、最初にきちんとした建物を丁寧に造る事だとあらためて思う。

欧米では100年以上も前に建てられた建物を現在も使い続けていることは、ごく一般的なことである。ビクトリア朝時代に建てられた校舎を今もそのまま使っている学校や、それ以前の時代に建てられた校舎の内部を今日的にリノベートして使い続けている学校の事例を見学したことがある。それらは決して無理をして、やむを得ず使っているのではなく、寧ろ誇らしげに自慢げに使っていたような印象が残っている。

不便で使いづらいものを我慢しながら使うことには大反対であるが、時代を経た学校施設を上手く改修・改善しながら使っている事例に出会うと、実に羨ましい感じがする。今では造れないような空間や、他ではお目にかかれないような材料・デザインが残っている言わば【オンリーワン】的な存在になっている学校施設には文化財的な価値がある。

京都の、かつての番組小学校の建物を今なお転用して、大切に使っている事例を見せていただいた。全国に学制が敷かれる前に、番組と言われる地域ごとに、自分達の手で地域の教育を担うために作り上げた学校は当然ながら、夫々で姿かたちは異なり、地域みんなが大切に使いながら守ってきた歴史がある。そこには多くの人々の【思い】のようなものが今なお結集しているように感じられた。学校を造った人々の思い、それを使い続けてきた人々の思い、地域の中で見守り続けてきた人々の思い。それらの継承されてきた思いが一つの文化になっているように思われ、京都という街にあらためて大人を感じた。

地域の発展のために学校施設を「よく」使う

浅井 経子（八洲学園大学・教授）



施設を改築したり、改修・補修したりすればそれなりにコストがかかります。経済の規模を縮小しなければならない現在およびこれからの社会にあっては、それはますます難しくなると思われます。しかし、施設を使えばそれだけ施設の老朽化は避けられません。しかも、変化の激しい社会にあっては、常に新しい時代にあった施設設備が必要とされます。

一方で、地方分権が進む中で、地域の自立が求められています。学校施設を使いやすく快適なものにしようとするれば、やはり地域の自立が前提になると考えられます。

そこで、地域の自立に役立つように学校施設をうまく活用し、地域を発展させることにより学校施設を充実させる、というように発想の転換を図ってはどうか。具体的にいえば、地域ビジネスの拠点としたり、地域の大学と連携して地域産業を開拓したりする拠点として、学校施設を活用することがあげられます。さらに、地域の人々の職業教育の場にするとも考えられます。地域の生涯学習は、なにも趣味的なものや教養的なものばかりではありません。

最近では、子どもたちに職業観を育成する必要があるといわれています。身近なところで、地域の発展のために働く人々がいることは、何よりもそのような教育の場になると思われます。学校施設を含め、これからの学校は、地域の発展とともにあるといえるのではないのでしょうか。

スペースを活かすきっかけとして家具を置く

伊藤 俊介（東京電機大学・講師）



これまで多くの学校を見てきて感じるの、家具をもっと置いてもいいのではないか、教室をもっと色々アレンジできるのではないかと、ということです。教室は40人学級ならば机をタテヨコに並べるので一杯ですが、それよりも小さい学級であればスペースに余裕も出てきます。教室の後方にグループでちょっと集まったり、作業をしたりするテーブル（ふつうの机を2つ、4つ合わせたものでもよい）を置くだけで、ずっと色々な活動ができるようになります。

また、多目的スペースや余裕教室を「できるだけ多目的に使えるように」何も置かないで広く空けておく学校は多いのですが、かえって使うたびに毎回、机を出してきて並べなければならないので、結局はあまり使わない場合も少なくありません。逆に、机やテーブルを常に並べておいて、思いついたとき、必要が生じた時にすぐ使えるようにしておいてはいかがでしょうか。図工や総合学習で作業中のものを、そのまま置いておいても良いかもしれません。その方が、いつでも（休み時間にも）作業の続きをすることができますし、いま何に取り組んでいるのかを表現する一種のディスプレイにもなります。つまり、学習の過程がいつも目に見えるようになります。

どういうふうにするのかはまだ分からないが、「とりあえず」家具を置いておく。スペースの余裕を、何か特別な活動や用途ではなく、日常の延長で活用するという方法もあります。

「環境の時代」における学校施設整備に関して

丹沢 広行（国立教育政策研究所・文教施設研究センター長）



既存施設の有効活用の主なメリットとしては、新しく建てる（建て替える）よりも少ないコストで済むということとともに、既存施設を壊すことなく使用するので、廃棄物も整備に必要な資材等も少なく済むなど環境にやさしい（環境への負荷の低減）ということが挙げられるでしょう。

現在建っている校舎等を今のニーズに100%対応できるような空間にリニューアルすることは難しいかもしれませんが、特に、メリットの後者、すなわち、環境への負荷の低減という観点から、若干の我慢をしてでも（もちろん、より豊かでニーズに合うような工夫・知恵を出すことは必要ですが）、既存施設の有効活用をまず第一に考えていくことが、私たちに課せられた責務ではないでしょうか。

21世紀は環境の時代とも言われていますが、言い換えますと、これまでの利便性を追求しつづけてきた、やりたい放題を反省し、これからは、「ほしがりません 環境が再生するまでは」というような我慢の時代というくらいの認識で臨んでいくことが必要ではないでしょうか。

「サステイナブル・ディベロップメント（持続可能な発展）」を合い言葉に、みんなで考え、知恵を出しながら、環境教育の教材としての活用という観点も加味しつつ、それぞれの地域にふさわしい既存学校施設の有効活用が進められていくことが期待されます。

なお、これからの新たな校舎等の整備においては、ながく・よく使える施設づくり（長寿命化のための設計・整備）を考えていくことが大切であり、更にその際、ライフサイクルコストとともに、ライフサイクル環境負荷というような視点からの検討も行っていくことも重要なことと思われまます。

既存学校施設のリニューアルで学校文化を ～使う側の立場から～

畑井 展子（横浜市立東小学校・校長）



日本の学校施設は外観上からも中の造りもどこの地に行ってもほとんど同じです。学校が建っている周囲の環境に違いがあっても、その地の特色が生かされない画一的なものがほとんどです。大量に建設しなくてはならなかった時代にはできるだけ低コストで造らざるを得なかったからいたし方なかつたことですが、その地の学校文化が感じられません。外見はもちろん校舎内も片廊下で教室と廊下の間は壁で仕切られているいわゆるハーモニカ型教室と言われている造りです。そして、これまで子どもたちは囲まれた自分の教室でほとんど学習するというスタイルでした。子どもたちも指導する教師も当たり前として使い、保護者や地域からも疑問に思う声もありませんでした。しかし、現在、閉ざされた一教室だけで学習することに教師も子どもも不自由を感じ始め、多様な空間を求めています。教育内容や方法が変化し、それに伴い学習形態が多様化し、教育機器も多岐にわたって使うようになりました。教室風景として黒板があり、それに向かって机・椅子が置かれ、教師は黒板を背に教科書をもって一斉に指導しているだけのスタイルではありません。既存の施設をそれでも工夫しながら使い始めています。

これから既存学校施設を大量にリニューアルする時代に入りました。それぞれの学校には特色ある教育活動を行うことが求められています。そのためにはハード面からの整備も必要です。改築ではなく、今、日々使っている施設だからこそ生まれるアイデアがある筈です。学習している子どもの立場から、また、指導する側から、そして、公共施設という観点から地域の考えも取り入れながら、シミュレーションしながら改修できるという大きなメリットがあります。そのメリットを最大限生かして、その地の学校施設として命を吹きこみ、学校文化を育てていきたいものです。

「みんなの学校」で感じたこと

藤田 正人（東京都大田区・施設管理課長）



むかし、田舎の小学校にいた子供の頃、学校が大好きでした。みんなの教室、広い校庭、鉄棒やブランコ、友達やいじめっ子など、楽しいことも不安なことも、嬉しいことも痛い思いもいっぱいありました。

木造校舎の廊下や教室の床は、掃除が行き届いていて、黒光りしていました。放課後は床に寝そべて本を読みました。昼寝もしました。イタズラもしました。先生にゴツンとされたことも何回もありました。でも、毎日学校に行くことが楽しかった。今の子供たちは楽しんでるのでしょうか。

全国には、兵舎の様な木造校舎から、近代的に改築された学校まであります。それらが、今、同時に存在しています。古くてもしっかりした木造建築もあれば、リニューアルと同時に他の施設と複合化されて生まれ変わったものもあります。その建物環境の差は小さくありません。空間の質の違いは、想像を超えるものがあります。

それでも、子供たちには、元気に遊び、勉強し、自然からも楽しんで楽しい時間を過ごしてほしいと願い、様々な取り組みを行っています。改善の方策が考えられています。

学校には、子供時代の記憶のカプセルがどこかに埋め込まれています。毎日楽しかったあの当時のみんなの記憶のカプセルが。

スペースの持つ力

湯澤 正信（関東学院大学・教授）



空間には力があると建築に携わるわれわれは考えます。スペースは人々のアクティビティの場となるだけでなく、より積極的にそれを誘発すると考えます。

今までの学校の設計の多くは、この力、つまり「スペースが教育に果たす力」を議論することなく、標準設計に基づき、ただ面積を用意することに終始していたのではないのでしょうか。また、学校の先生方も教育方法はよくわかっていますが、それが行われる場については無関心でした。

この力への注目、学校をスペースとしてその可能的な使用を考えることに導いてくれます。例えば地域開放です。今まで学校はまず学校としてあり、それが空いているとき地域に貸し出しました。開放の実態調査が示している低い開放率の原因にはこの考えがあるのではないのでしょうか。スペースの持つ力はそれが子どもの教育に向かおうが、地域づくりに向かおうが区別はありません。学校という建物が持つ可能的使われ方を考えれば、学校も地域もお互いに利用者であり、両者で管理のしかたを率直に話し合えばいいという考え方となります。

また安全性についてもいえます。安全性をハード面のみで追求するあまり、ガードばかりが固く、がんじがらめな施設が出来上がってしまいます。これでは「スペースが持つ力」がしなやかに発揮されることはありません。例えば、スペースを工夫して地域の人が常に学校に出入りし、みんなの目で不審者の侵入を防ぐことも可能だと思えます。

既存施設の有効活用を考えることは、現に使っている空間が相手ですから誰にでも具体性を持ってこの力について考えることができ、学校と地域との関係や、教育学と建築学との関係を再考することにもなると思えます。